
男なんて大ッキライだっ！！！！

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男なんて大ツキライだっ！！！！

【Nコード】

N0076N

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

「男はもうこりこり！」なバツ1の美貴。あの手この手で言い寄ってくる顔にうんざりしているのだが・・・

（、A）（、A）（、A）

「いい加減、観念しな」

私が頭あたまの口真似をしてそう言つと、
目の前に座っていた「カー君ママ」はむせ返つた。

「あはは・・・鼻からコーヒーが出るかと思つた・・・あは」
「ねえ？他に言い方はないのか、って感じよね」

私はそう言いながら、隣の席に座っている娘・綾音あやねの口をナプキンで拭いた。

アイスクリームでベトベトだ。

ちなみにかー君ママの隣に座っているかー君の口の周りも同様である。

今日は綾音の4歳の誕生日、ということで、シングルマザー同士仲良くランチだ。

略歴を言つておくと、

私は高校卒業後、夢を追いかけて専門学校に入つたものの、そこで知り合つた男と19歳でデキ婚。

専門学校は辞めて専業主婦になつたけど、わずか1年半で別居というお決まりのパターン。

実家に戻つてからは、バイトしながら再入学した専門学校に通っている。

そしてつい先日、23歳の誕生日を迎える直前にでめでたく（？）離婚。

やったあ。

「それにしても顕さん、本当に美貴さんのこと好きなんですね」
「そうみたいねー」

遠慮の欠片もなく頷く私に、またかー君ママが笑う。

「付き合えばいいのに」

「私、離婚したばかりよ？男はもういいわ」

「そうこうしているうちに、歳取っちゃいますよ？」

私はわざと意地悪を言うことにした。

「お互い様でしょ」

「・・・」

かー君ママが急に黙り込み、ストローでコーヒーを飲む。

かー君ママは18歳で妊娠・出産し、結婚しないまま1人で頑張つて子育てしている。

でも今もまだ、かー君のパパのことを忘れられないでいるのだ。

まあ、事情はそれぞれ違えども、私とかー君ママは歳も現在の境遇も似ている。

かれこれ2年近い付き合いだ。

私は、しょんぼりしてしまったかー君ママに申し訳なくなって、話題を変えることにした。

「3月にはかー君も2歳ね。またどこか子連れで行けるお店を開拓してお祝いしようね」

するとかー君ママも急に元気になって「はい！」と言った。

「倉田さん。倉田さんのお店の荷物は午後1時に搬入予定ですから、それまでに誰かを駐車場へやってください」

「はい」

仕事モードの私は、はっきりした口調で返事を返す。

「他に連絡事項は・・・ないですね。以上です。では、今日は羽田^{はた}さん、お願いします」
「はい！」

デパートのマネージャーに指名された「羽田」は、大きな声と爽やかな笑顔で、

「今日も一日、お客様のために心を込めて接客しましょう！」と決められた台詞を口にした。

私を含め、その場にいる全店の店長もしくは店長代理が、同じ台詞を復唱し、

朝のミーティングは終了となった。

私がバイトしているナチュラル&綺麗系の服が売りのショップは、新宿のとあるデパートの3階にある。

実はかー君ママと知り合ったのも、かー君ママがうちに服を買いに来てくれたのがきっかけだ。

最近じゃ、デパートの中のお店の代表者が集まって行われる朝のミーティングに、

店長代理として出たりもしていて、結構重宝されている、つもり。

「よう。美貴」

「・・・おはよう」

せつかくのすがすがしい朝だというのに、さっきの爽やかな笑顔をどこかへ捨ててきた羽田顕が私に近寄って来る。

来るな、来るな。移る。

「移る、って何が？」

「性病」

「・・・爽やかさを捨ててるのは、どっちだよ」

顕は大袈裟に顔をしかめた。

が、すぐにニヤツといやらしい笑顔になる。

客の前では絶対見せない顔だ。

「今晚、一緒に飯食おーぜ」

「ダメ。学校あるから」

「終わるまで待つてゐるって」

「早く帰って、綾音とご飯食べなきゃいけないから無理」

ところが、顕は「得たり」という風な表情になった。

「よっしゃ。綾音ちゃんも一緒に食おうぜ！この前誕生日だったんだろ？」

俺にも祝わせてくれよ」

「なんで顕なんかに綾音の誕生日を祝ってもらわなきゃいけないのよ」

「俺の愛する美貴の娘だから」

「・・・・・・・・」

しらつとした空気が流れる。

なんとかしてくれ、このアホ男。

顕は、デパートの7階にある男性専用のアクセシヨップの店員だ。

一応付け加えておいてやると、バイトではなく正社員。

私がバイトを始めた頃から何故か私に言い寄ってきている。

それでも最初の頃はもっと控えめ、っていうか、普通のアプローチだった。

だけど私が、子持ちで旦那と別居中、加えて男はもうこりこり！と思っっていると知るや否や、

恥じも外聞も捨てたアプローチに切り替えやがった。

これを迷惑千万と言わずして、なんと言う！

「パス」

「なんでだよー？」

「うざいから」

「・・・」

顕は「はぁ」と肩を落とした。

「俺はこんなにも、美貴と綾音ちゃんのことを愛しているのに」
「・・・」

私は思わず刃物が落ちていないか探した。

私は、旦那、いや、元旦那のことをいい加減な男だとは思っていない。
い。

元旦那がいい加減なのではなく、男というのは総じていい加減な生き物なのだ。

元旦那の名前を思い出すのも嫌なので、仮にB男と呼ぼう。
ちなみに「B」は「馬鹿」の「B」だ。

B男は見た目だけはいい男だった。

だから私もコロツと騙されて、専門学校に入学してすぐに付き合い始め、

これは私も馬鹿だったんだけど、すぐに妊娠してしまった。
そしてすったもんだの末、結婚して子供を産むことになった。

B男は別に浮気した、とか、ギャンブルで金をすった、なんてことをした訳じゃない。

敢えて言うなら「何もしなかった」のだ。

綾音が泣いてたら「おい、美貴。泣いてるぞー」と私を呼ぶ。すぐ横にいるんだから、お前が抱っこしろよ。

綾音がうんちしてたら「おい、美貴。うんちー」と、やっぱり私を呼ぶ。

うんち、っってお前がしたのか？

また、珍しく「綾音と散歩してくる」と出掛けたかと思ったら、10分もしないうちに「綾音がぐずる」と言っつて、綾音以上に不機嫌になつて帰ってくる。

自分と綾音の機嫌がいい時だけ、綾音を可愛がり、面倒なことは全て私に押し付ける。

綾音のことだけじゃない。

掃除機をかけてると「俺、ホコリアルレルギーだから」と家から1人でさっさと出て行く。

雨が降ってきたから、と、私が大慌てで洗濯物を取り込んでるのに、テレビ見てゲラゲラ笑ってる。

・・・わかつてる。

私は専業主婦だし、B男も専門学校を辞めて今は働いている。

家のこと、子供のことは私がやるべきだ。

そう思つて、数々のことを我慢してきた。

しかし、ついに我慢の限界がきた。

ある日、私は風邪を引いた。

そんなにひどい風邪じゃないし、熱も37.5度。

まあ、家事ができないこともない。

だから私は、B男に「今日くらい家事やってよね!」とは言わないでおこうと思ったし、

自分でやるつもりだった。

ただ、嘘でもいいから、

「大丈夫か?今日は寝てろよ。家のことは俺がやるから」とか、

「飯は綾音と外で食ってくるよ」とか、

「仕事休むよ」とか、

「綾音をどっちかの実家に預けようか?」とか、

そんな言葉をかけてほしかった。

でもB男は、私が風邪を引いていると知っていながら、

ま、なんとかなるだろ、と、いつも通り私と綾音を置いて仕事へ行った。

大したことじゃないかもしれない。

だけど今まで我慢してきたものが一気に爆発し、

私は荷物をまとめて綾音と実家に舞い戻った。

B男は何度か私と綾音を迎えにきたけど、

自分のどこが悪かったのか、まるで分かっておらず、

私はB男の元に戻る気になれなかった。

結婚している友達の話を聞いていると、どこの旦那も大差ない。

よくみんな、笑って我慢できるな、と関心してしまう。

私の心が狭すぎるのか?

でも、旦那のワガママに耐えるのが「結婚」なら、
私はもう二度と結婚したくない。
もう二度と男と付き合ったりしたくない。

男なんて大ッキライだっ！！！！

（、A）（、A）

「おい、そのストーカー。通報するぞ」

「相変わらず冷たいな」

専門学校の建物を出たところで私を待ち伏せしていたストーカー男が、

ポケットから車のキーを取り出した。

「送るよ。で、綾音ちゃんを拾ってレストランに行こう」

「嫌、って言ったでしょ？」

とは言いつつ、私の心は揺れていた。

頭に向かって揺れていたのではない。
車だ。

雨がポツポツしてきたし、傘も持っていない。

「ここで雨に負けてストーカー男の車に乗るか、
女のプライドで雨にびしょ濡れになりながら帰るか・・・」

「何１人でブツブツ言ってるんだよ。」

明日からバーゲンだろ。風邪引いて出られなくなったら、美貴の店の人が困る」

「・・・」

私はそう言われると弱い、ということを感じているところがまたムカつく！

仕方なく私は頭のワンボックスに乗り込んだ。

そして、家に着いたら「じゃあ、バイバイ」とは言わせてもらえず、頭はさつさと1人で車を降り、勝手に私の実家のインターホンに向かって、

「綾音ちゃん！パパが迎えに来たよー！」とか言ってるやがる。

「パパ」って！！！！！

やめれ！！！！！！

「しんっじられない！！」

「そう言いつつ、しっかりコース料理食ってるのはどこの誰だよ？」

あたしだよ（にしおかすみこ風）。

これ食べたら速攻で帰るんだから！

「綾音ちゃん。ご飯とデザート食べたら、パパとおもちや探しに行こうね」

「うん！綾音、『モノランモノラン』のお人形がいいなあ！」

「よしよし。んじゃ、トイザラスに行こう。どのお人形がいい？
ブート？ライゴウ？スイリン？全部でもいいよ」

「虫眼鏡の探偵さん！」

「渋いね」

「ちよつと、頭、綾音！ダメよ！」

勝手に盛り上がってる2人を私は慌てて止めた。

綾音は何度か頭に会ってるし、なついてる。

しかも今日は綾音の誕生日ってことで、

ご飯も豪華だし、バースデーケーキまで出てきた。

しかもトイザラス。

綾音がご機嫌にならないはずがない。

でも、ダメ……！！

「綾音！もうプレゼントは買ってあげたでしょ！？じいじからもばあばからも、

かー君ママからも貰ったじゃない！」

「えー？パパからは貰ってないもん」

「綾音！」

綾音はB男のことは「お父さん」と呼んでいた。
そして今、頭のことは「パパ」と呼んでいる。
(というか、頭が呼ばせている)

「頭も！綾音に自分のこと『パパ』なんて呼ばせないで！」

「えー？どうせ近々本当の『パパ』になるのに」

ならん……！！

「じゃあ、お……」

「『お父さん』もダメ！」

「ちえっ」

「それに！私、今日は学校の課題があるから、もう帰らなきゃ！」

「よし、じゃあ綾音ちゃん。パパと2人でトイザラスに行こう」

「うん！パパ！」

だから、ダメだって！！
てゆーか、「パパ」じゃなーーーーい！！

「はあ」

私は型紙に線を引きながら、ため息をついた。

本当に2人でトイザラスに行ってしまった。

信じられない。

B男だって、綾音と2人でおもちゃ買いに行ったことなんてないのに。

あのアホ頭め。

さては綾音に取り入って私に近づこうって魂胆だな？

ふんっ、そうはいくもんですか。

それならこっちも利用させてもらうんだから！

綾音のおもちゃはこれから全部頭を買わせよう。

私がちよつと頭に気のある振りをしたら、絶対上手く行く。

男って、ほんと馬鹿よね！

「あ、しまった・・・」

勢い余って、強く線を引き、台紙を破ってしまった。

あーあ、やり直したわ・・・

今日は踏んだり蹴ったりだ。

学校の前で頭待ち伏せされるし、

車に強引に乗せられて、綾音ともども拉致られるし、

なんか一緒にレストランでご飯食べさせられるし、

そのまま綾音はトイザラスに連行されるし。

・・・

でも、お陰で雨には濡れなかったな。

それに子連れで行けるレストランなんてファミレスくらいしかないのに、

今日行ったところはちょっと高級なレストランだったけど個室だったから、

綾音が一緒でも気兼ねせずにすんだ。

ご飯も久々にコース料理なんて食べれたし、ケーキも・・・

私は台紙を机に置くと、

立ち上がって窓から外を見た。

すっかり土砂降りだ。

そう言えば、天気予報で今夜は夕方から雨って言うってた。

頭はそれを知っていて、迎えに来てくれたのかな？

それに・・・そうだ。

「モノランモノラン」。

NHKの「おかあさんといっしょ」のキャラクターだ。

顕はそのメインキャラの名前を知っていた。

「モノランモノラン」はこの4月に始まったばかりのお話なのに、なんで顕はそんなの知ってるんだろう・・・？

もしかして、綾音と仲良くなるために勉強したのかな？

・・・まさか、ね。

「ママー！じいじ、ばあば、ただいまあ！！！」

玄関の扉の大きな開閉音と共に、1階から綾音の元気な声がこだました。

「あら、お帰り。綾ちゃん」

「見て！ばあば！虫眼鏡の探偵さんのぬいぐるみ！！」

「あらまあ、よかったわねえ」

「うん！」

そんなマイナーキャラのぬいぐるみ、よく売ってたな。

私は、やっぱり一言お礼言つとかなきゃな、と思い、

部屋の扉を開けて1階へ降りようとした。

ところが、それと同時に、また綾音とばあばの会話が聞こえてきた。

「羽田さんが買ってくれたのよね？ばあば、ちょっと羽田さんにお礼言っわね。」

綾ちゃんは、濡れちゃうからお部屋で待ってて」

「え？もう帰っちゃったよ」

「あら、そうなの？」

「うん。『バーげんのじゅんび』があるからお店に戻るんだって」

今から！？

・・・って、まだ9時だ・・・

私の学校が終わったのが6時だったから、
頭はお店がまだやってる時間にもかかわらず、私を待ち伏せしていたことになる。

・・・私と綾音と食事して、綾音にプレゼントを買うために、
バーゲン前なのに、お店抜けてきたのかな。

私はバイトだから、問題ないけど、頭は・・・

「ママ！見て、見て！」

私が考え込んでいると、綾音が正真正銘「虫眼鏡の探偵さん」のぬいぐるみを、

満面の笑みで抱き締めながら走ってきた。

「凄いでしょ！？一個だけあったの！！」

「ほんとね。よく見つけたわね。どこ探してもなかったのに」

「うん！ダディが3つもトイザラス回って探してくれたの」

「そう、よかつ、」

おい。

「ダ、ダディ？何、それ？」

「パパがね、

『ママがパパのことパパって呼んじゃダメって言ったから、ダディにしよう』だって！」

「・・・」

どこの郷ひろみだ！！！！

ふざけんな！！！！

やっぱり、

男なんて大ッキライだっ！！

(、A)

「おはよう。ダディ」

私がわざと大きな声でそう言ってやると、さすがに頭もちょっと恥ずかしそうに周囲に目をやった。

「おい。店の中でそんなこと言うなよ」

「あら、頭が綾音にそう言えって言ったんでしょ？」

「・・・」

「だから私もそう呼ばせてもらっわ」

すると頭はなれなれしく私の肩に手を回してきた。

「わかった。でも、ベッドの中だけにしてくれ」

「羽田さん、おはようございます。あれ？顔、どうしたんですか？」

「おはよう、野口・・・いや、ちょっと裏拳を食らって・・・」

「は？」

鼻をさする頭を、頭のシヨップの野口君ってバイトの子が不思議そうに見る。

「野口。俺、ちょっと倉田さんとだいじな話があるから、ちょっと」

と出るな」

「はい。って、え！？もうすぐ開店ですよ！？バーゲンですよ！？」

「1人でなんとかしろ」

「そんな〜！」

そんな〜！は、私もだ。

「ちょっと。私も店に戻りたいんだけど。頭とだいじ〜な話なんてないし」

「俺はある」

頭は有無を言わず、私をスタッフルームに連れ込んだ。

スタッフルームと言っても、早い話が在庫置き場だ。

ダンボール箱が所狭しと置かれていて、地震が起きた時にここにいたら簡単に死ねる。

頭はスタッフルームの奥のダンボールの陰に私を押し込んだ。

「何？タイマン？」

素早くファイティングポーズを取る。

「・・・お前は どうして考えることが いちいち 可愛くないんだ。

普通、こういう状況だと『きゃっ！キスされるのかしら！？』とか、
思うだろ、ふつー」

頭が気持ち悪く「きゃっ」ってやってみせる。

「ふつー、はね。私、もうそついう『恋する乙女』は卒業したから」

「俺は卒業を許可した覚えはない。留年だ、留年」

なんだ、留年って。

ちようどその時、開店の音楽が流れてきた。

マジで時間の無駄だ。

「ねえ。だいじな話って何？さっさと言ってよ。私、もう店に出たいんだけど」

「・・・もう、いい」

頭はクルツと180度回って私に背中を向けると、扉に向かって歩き出した。

お？

「もしかして、本当にキスするつもりで、私をここに連れてきたの？」

「うん」

「・・・」

「それなのに、お前がタイマンだなんだかんと言っから、タイミン
グ逃しちゃったじゃねーか」

「・・・」

「恋する乙女」を卒業していなければ、こーゆー時、「胸キュン」
するの？

生憎卒業生には「胸ヤケ」はあっても「胸キュン」はないぞ。

スタッフルームを出て、ちらほらとお客さんが入ってきたデパート

内を足早に歩いていると、
頭が私の少し後ろでため息をついた。

「どうやったら、いい加減観念してくれるんだよ」
「だから、観念しないって。男なんてみんな同じ。嫌いよ」
「・・・」

頭が突然足を止めた。

1人で勝手に足を止めるのは自由だけど、私の腕を掴むのはやめてくれ。

「美貴。お前、男なんてって言うけど、お前はどんなだよ？」
「は？」
「お前は、胸張って『私は良い妻でした！』って言えるのかよ？」
「・・・」

い、言えるわよ。

私、ちゃんと掃除も洗濯も炊事もやってたもん。
子育てだってやってたもん。

「旦那だって、ちゃんと仕事してたんだろ？だったら、お前が『良い妻』なら、
旦那だって『良い夫』じゃねーか」
「・・・」

「でも、お前は旦那のこと『良い夫』って思ってたなかった。
ならお前も『良い妻』じゃなかったってことだ」

何よ。

何が言いたいよ。

「お前、旦那が仕事して金稼いできてくれることに、ちゃんと感謝してたか？」

「ご苦労様、って気持ちを込めて家事とか育児、してたか？」

・・・。

「そ、そんなの！旦那だって、私がご飯作ったり子供の世話してることに、

感謝なんかしてくれてなかったわ！当たり前だって、思ってた！」

「だろーな。お互いそれじゃあ、上手く行くわけないよなー」

・・・。

何よ。

何よ、何よ、何よ！

私は頭の手を振りほどいた。

「あのね！結婚って、そんな甘いもんじゃないのよ！

毎日、生活に追われてるのよ！感謝なんていつもいつもしてられないわ！

お互いの役目を果たすので、精一杯なの！」

「旦那はちゃんと役目果たしてたんだろ？お前も。

じゃあ、なんで上手く行かなくなるんだよ？」

「それは・・・合わなかったのよ、私と旦那は！

それに・・・旦那は役目を完全には果たしてなかった・・・家の事だって綾音の事だって・・・」

私は少しずつ声が小さくなった。

確かに、私^{わたし}的には、旦那は役目を完全には果たしていなかった。
でも、私はどうだろう？

旦那的には、私は役目を完全に果たしていたのだろうか？

てゆーか、「役目を完全に果たす」ってなんだろう。
そんなこと、できるんだろうか。

黙りこくった私を見て、頭が言った。

「お互い、自分の役目を50%果たしてりゃ充分なんだよ。2人合
わせて100%だ」

「・・・なんて単純なの」

「人間つてのは単純な生き物だ。美貴と旦那は2人で足して100
%になれなかった。

だから上手く行かなかったただけだ」

「・・・」

1人で50%、

2人で100%か。

なら、

きつと私と旦那は2人とも40%だったんだ。

もし、私がつと頑張つて60%なら、

2人合わせて100%で別れることはなかったかもしれない。

だけど、60%はちょっとしんどい。

40%の1.5倍だもん。

でも、50%だったら・・・もしかしたら、できるかもしれない。

頭なら、残りの50%を補ってくれるだろうか？

頭が人前にも関わらず、真面目な顔をして私の両肩をガシッと掴んだ。

「美貴。前の旦那とは100%になれなかったかもしれないけど、俺となら間違いなく100%になれる。だから結婚しよう」

「イヤ」

ガクツと、頭が頭を垂れる。

「俺、今結構いい話、してたと思うんだけど」

「そうね。まあ、私の人生の1ページの余白に記しておいてあげてもいいわ」

「・・・」

その時、廊下の向こうから「ママー！」と言って綾音が駆けて来た。

「綾音！？どうしたの？」

「ばあばと来たの！ばあばが、ダディに昨日のお礼を言うんだって！」

綾音のずっと後ろに、お母さんが手を振って歩いて来るのが見える。

綾音が虫眼鏡の探偵さんのぬぐるみをぎゅっと抱き締めた。

「ダディ！昨日はありがとう！」
「どういたしまして」

お客さん達が、綾音の大きな「ダディ」という声に、クスクス笑う。

「そうだ、綾音ちゃん。俺が結婚してくれて言ってるのに、ママがイヤって言うんだけど」

「えー？じゃあ、綾音と一緒にお願いしてあげる」

すると、綾音が突然、床にペタンと正座し、

「ママ！ダディとケッコンして下さい！」

と言って、ガバツと頭を下げた。

綾音！

絶対、意味分かってないでしょ！？

頭も調子に乗って綾音の横に正座する。

「美貴！俺と結婚して下さい！」

「あ、あの、ね。何考えて、」

「ママ！お願い！」

「美貴！お願い！」

公衆＋お母さんの面前。

恥ずかしいったらありやしない。

「お母さん・・・助けて・・・」
「ねえ」

ねえ、って！

娘の一世一代の危機なのに、何、その「ねえ」って！？

更に。

「すごい、土下座してプロポーズなんて、テレビ以外で見たの初めて」

「俺、テレビでも見たことない」

「お姉さん。結婚してあげなよー」

「そのジュエリーショップでエンゲージリング、売ってるよ？」

無責任な野次馬共・・・いやいや、お客サマ達が、温かい言葉をかけてくれる。

おう、ほっとけや。

「ママ！綾音、ダディにお父さんになってほしい！」

「あ。綾音ちゃん、ダディとお父さんは同じ意味だから。どっちもパパってことだよ」

「じゃあ、ダディはもう綾音のお父さんなんだね！」

「そうそう。お父さんだよ」

「やったあ！」

「綾音！頭！！」

私を無視して「やった、やった♪」と踊りだす二人。
相変わらず「ねえ」という表情のお母さん。

ニヤニヤ笑うお客サマ達。

ああ！もう！これだから！

男なんて大ッキライだっ・・・もん！

—— 「男なんて大ッキライだっ！！！」
完 ——

（、A）（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

え？この物語の意味？

いえ、特に・・・タロウの心の叫びじゃありませんよ？断じて！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0076n/>

男なんて大ッキライだっ！！

2010年10月10日18時26分発行